研究論文

離島部における学校と地域コミュニティの連携

――対馬市におけるインタビュー調査からの考察――

比田勝 開斗（対馬市立東小学校[1]）　西田 治（長崎大学教育学部）

１．研究の問いと目的

筆者は小、中学校までは故郷である対馬市で、高校、大学は本土部に出て教育を受け、離島である対馬市の方が学校と地域が一体となって教育に取り組んでいる印象を持った。そこから、離島部と本土部の違いについて、学校と地域との連携の視点から研究を進めたいと考えたのが研究の端緒である。

本稿のリサーチクエスチョンは、「離島部における学校と地域コミュニティの連携はどのように行われ、どのような良さと課題があるのか」である。この問いについて、対馬市内の小学校へのインタビューを中心として調査することで、離島部における学校と地域コミュニティの連携について、現状の一端を明らかにすることを目的とする。

２．先行研究の検討

離島部における学校と地域コミュニティの連携に関しては、主として三つの方向性の先行研究が存在する。一つ目は、地域と連携して授業を作っていく地域学習に関するものであり、これには多数の先行研究が存在するが、対馬に関するものとしては、岩田貢（2009）が同市内の中学校社会科を例に考察を行ったものがある他、長崎県内を題材としたものとしては橋本健夫・楠本正信（1997）の環境教育のための地域教材開発などがあげられる。二つ目は、歴史に関する研究であり、例えば前田晶子（2004）は、沖永良部島における 1960－70 年代を取り上げ、学校と地域の関係を歴史的に分析し学校の役割を明らかにしようとしている。三つ目は、地域における学校の必要性、役割を明らかにしようとするものであり、堀本雅章（2013）や下橋邦彦（2016）があげられる。この他にも、島留学などを学校と地域が連携して行うものなど、多様な先行研究が存在するが、対馬市を対象として小学校現場へのインタビュー調査からその内実を明らかにしようとしたものは、管見の限り見当たらないため、本稿ではインタビューによって現場の声から考察を進めていきたい。

---

[1] 投稿時は長崎大学教育学部生

３．インタビュー調査

本稿では、対馬市内にある 4 校 4 人の校長先生にご協力いただきインタビュー調査を行った。調査の概要は以下のとおりであり、インタビュー時間は、一校につき約 40 分、質問は 5 項目である。

〇日時：2019 年 11 月 7 日～11 月 8 日
〇場所：長崎県対馬市
〇児童数：Ａ校：244 名　Ｂ校：344 名　Ｃ校：57 名　Ｄ校：107 名

設問 1 は、「離島部において学校と地域コミュニティは年間を通してどのように結びついて教育を行っているか。」である。共通して上げられた回答として、次の 2 点がある。

一つ目は、以下に示すように、生活科や総合的な学習の時間などの授業の際に、子どもと地域の方が関わることができる機会を設けている点である。具体的には、次の通りである。

Ａ校：4 年生が地域の職業を調べる学習として、漁業や農業に携わっている方や海上保安庁に話を聞いている。
Ｂ校：ふれあい学習として、1 年生の生活科で昔遊びを行い、高齢者の方に学校に来ていただいて、一緒に活動を行った。4 年生の総合的な学習の時間では、元高校教師の方が長崎市から来られて、生き物に関する話をしてくださった。
Ｃ校：2 年生は、まちの名人とふれ合う学習、3 年生はアスパラ農家の方との学習、4 年生は福祉施設での学習、5・6 年生は対馬の自慢できるものを探してその対象者と関わる学習をそれぞれ行った。
Ｄ校：生活科の町探検の際や、総合的な学習の時間でのゲストティーチャーを地域の方にしていただいている。ゲストティーチャーの方には、毎年関わってくださる方が多く、継続的に繋がることができている。3 年生が行う、そば作り体験では、そばを自分たちで作って対馬の郷土料理である、いりやきそばを作る活動を行っている。

二つ目は、以下に示すように、地域のお祭りや行事などに子どもや教員が出向いて地域と関わっている点である。具体的には、次の通りである。

Ａ校：地域のお祭りに参加している。学校の近くにある八幡神社のお祭りでは、奉納相撲を 5・6 年生が行っている。
Ｂ校：校外行事にはできる限り子どもたちを参加させるようにしている。地域のお祭り、催し物などには子どもたちを参加させて、地域と一体となって教育を行っている。

Ｄ校：地域行事としてはお祭りによく参加をしており、近くの神社のお祭りでは、奉納相撲などを行っている。また、地域の文化祭にも参加をしている。子どもがいることで、地域行事に来てくださる方も増え、その行事自体も盛り上がっていく。

ここから、学校と地域コミュニティは生活科や総合的な学習の時間などの授業や地域行事を中心として結びついていることがわかる。その他にも、あいさつ運動や放課後子ども教室で結びついているという意見も聞かれた。また、学校が地域コミュニティにお世話になるばかりではなく、地域行事、特にお祭りの際には、教員や子どもたちが地域に出向いていくことで、それが地域活性化につながっていることが示唆された。

設問 2「地域コミュニティと学校を繋ぐために教員にできることは何か。」については、共通して上げられた内容として、次の 2 点がある。

一つ目は、以下に示すように、積極的に地域に出向いていく点である。

Ａ校：対馬の魅力を子どもたちに伝えるようにし、できる限り地域に出向いていくことが大切になる。授業に生かしていくためにも、その地域のことについて知り、学んでいくようにする。

Ｂ校：地域に積極的に出ていくことが大切になる。「フットワークによるネットワーク、チームワークづくり」が大切で、地域の行事には教員も積極的に参加することや地域のためになる取り組み（フットワーク）を企画することによって連携を取っていく。

Ｃ校：情報発信をして地域行事などに出向き、良好な関係作りに努めていく。

二つ目は、以下に示すように、地域と仲良くなり、地域を愛する点である。

Ｃ校：いかに地域と仲良くなるかということ。

Ｄ校：学校や地域を愛することが大切。

ここから、地域コミュニティと学校を繋ぐために教員にできることは、大きく２つであり、地域に出向いていくこと、地域を愛することであることが示唆された。できる限り地域に出向いていくことで、地域の方とのネットワークを作っていくとともに、その地域の良さや魅力を発見し、発見した地域の良さや魅力を授業で伝えていくことで、子どもたちに郷土愛を育むことができると考える。子どもたちに良さや魅力を伝えていくためには、まずは教師自身がその地域を愛し、行動することが第一歩となるだろう。

設問 3「学校と地域コミュニティが連携する上での課題は何か。」について

は、共通して上げられた内容として、次の２点がある。
一つ目は、以下に示すように、人材が不足している点である。

Ａ校：学校と地域の窓口となる人材も必要であって、そういった人材の育成も課題になる。
Ｂ校：地域連携をコーディネートする、キーマンとなる人材が必要になることが挙げられる。主に学校では、教頭が行っているが、教頭は忙しいため、なかなか大変な部分がある。地域の中にも、学校との繋がりをコーディネートしてくれる人材がいれば、さらに良くなると考えている。
Ｃ校：地域の中に核となる人がいないことが挙げられる。核となる人というと、地域と学校を繋いでくれる人のことで、そういった人物が出てくればよいと考えている。
Ｄ校：人材の不足が挙げられる。児童・生徒の人数だけではなく、地域住民の人数も減ってきているため、人材の不足が１番の課題ではないかと考えている。

四校ともに、人材不足を課題として挙げていることからも、学校と地域コミュニティが連携していく上で、人材不足が一番の課題となっていることがわかる。学校と地域コミュニティを繋ぐ、地域の核となるような人材がおらず、連携するのが難しくなっている原因としては、人口減少・若者不足ということが挙げられると考える。ここから、長崎県や対馬市が抱えている人口減少という課題が教育上の課題にも繋がっていることが示唆された。
二つ目は、以下に示すように、教員の勤務時間が長くなり、働き方改革の実現が難しい点である。

Ａ校：一番の課題としては、勤務時間が長くなることが挙げられる。土曜日や日曜日の休日にも地域行事があることがあるが、校長の立場としては休日の活動は、ボランティアになるので、強制をすることはできない状況にある。
Ｂ校：働き方改革とのバランスも重要であり、地域の行事は休日にあることが多いので、休日に地域行事に出向くことが多くなってくる。教員でなくても、地域に出向くことは大切なことであるが、学校と地域の連携を図るためとなると仕事として行っているような感覚があり、難しい部分である。

今日、教員の働き方改革が進められているが、地域行事などは休日にあることが多いため、バランスを取るのが難しくなっているということがわかる。地域行事に参加するのはボランティアとして参加し、仕事で参加をするわけではないの

で、どこまで参加するかの判断が難しいと感じた。仕事やプライベートの負担にならない範囲で、地域行事にも積極的に出向いていくことが大切になのではないかと感じた。

設問４「学校と地域コミュニティが連携する良さは何か。」については、共通して上げられた内容として、次の３点がある。

一つ目は、以下に示すように、授業や子どもたちの人間関係に多様性が生まれる点である。

Ａ校：地域の方と関わることになると違う方向から子どもを見てくれるので、子どもたちにとっても良い刺激になる。
Ｂ校：授業に地域の方が入っていただくことで、学びに多様性が生まれていくことが挙げられる。
Ｃ校：学校の教員が詳しくないことであっても、その道の専門家やプロが地域にいれば、実際に出向いて聞くことができる。そこから、学習の深まりに繋がっていく。
Ｄ校：子どもたちにとっては、地域の人たちからこれまでの経験や知識を学ぶことで、勉強になる。

ここから、地域コミュニティと関わることによって子どもの学びが多様になるとともに、教師自身がその地域を理解することにもつながることがわかる。子どもは普段の学校生活では、教師から指導を受けることが圧倒的に多いが、地域の方と関わる機会を作ることによって、学びが深まっていくとともに、新たなネットワークができていくため、人間関係もより豊かになることが示唆された。

二つ目は、以下に示すように、子どもに郷土愛を育むことができる点である。

Ａ校：子どもたちが地域の方や地域の文化財と関わっていくことで、郷土愛を育てていくことができることも良さの一つである。郷土愛を育てていくことで、子どもが「この地域にずっと住んでいたい。」という気持ちになれば、人口減少の問題も少しは改善できるのではないかと考えている。
Ｂ校：児童が地域の一員として、意識を深めることで、郷土愛が生まれることも挙げられる。子どもたちに郷土愛が育まれることによって、その地域で活躍する後継者育成に繋がっていくものだと考えている。

ここから、子どもたちに郷土愛を育むことで、その地域の後継者育成にも繋げることができることがわかる。地域コミュニティと関わり、地域の文化財や郷土料理に触れていくことで、その地域の良さや魅力が子どもたちにも見えてきて「将来、ここで働きたい」と考える子どもが出てくることが期待できるというこ

とがわかる。離島部では特に人口減少が課題となっているが、学校と地域コミュニティが連携することで、そういった問題の改善に繋げられる可能性が示唆された。

三つ目は、以下に示すように、地域の活性化につながる点である。

Ａ校：地域を活性化させ、地域が行っている行事を維持させるためにも、学校の協力は必要になると考える。
Ｃ校：地域の活性化に繋がることが挙げられる。現在、地域が衰退してきており、地域にいらっしゃるのは退職された方やお年寄りの方が多い。しかし、そういった方たちも、何かしらの特技や経験を持っているので、学校と繋がることによって活躍の場を与えることができる。
Ｄ校：地域にとっては、子どもがいることで街に活気が出て、活性化に繋がっていく。

学校と地域が連携することで、地域の方の活躍の場を作ったり、子どもが地域に出ていくことで、地域の活性化につながることが示唆された。

設問5「本土部と離島部での学校と地域コミュニティの関わり方の違いはあるか。」については、以下に挙げるように、共通して上げられた内容としては、基本的に大きな違いはなく、地域性によって変わってくるという点である。

Ａ校：本土部だから、離島部だからという大きな違いはないが、それぞれの置かれた場所の校区にどういった人たちが住んでいて、どういう企業があるのかで違いが出てくる。
Ｂ校：人と人との関わりであるので、基本的には違いはないと考える。
Ｃ校：その置かれた地域の地域性によって変わってくる。
Ｄ校：基本的には大きな違いはないが、学校規模の違いにより、関わり方が違うように感じることはある。

ここから、本土部と離島部での学校と地域コミュニティの関わり方は、大きな違いはなく、学校規模やその地域の地域性によって変わってくるものであることがわかる。学校と地域コミュニティの結びつきはそれぞれの学校、地域によって異なってくるため、離島部、本土部という分類で考えていくことはふさわしくないことが示唆された。

設問6「離島部の中での規模が大きな学校と小さな学校での地域コミュニティとの関わりに何か違いはあるか。」については、共通して上げられた内容として、以下に示すように、大きな違いはないが学校や地域性によって違ってくると

いうことが挙げられた。

Ａ校：置かれている地域の様子によって違ってくる。
Ｂ校：多少違いはある。
Ｃ校：その地域とその学校の考え方による。地域の面から見ると、地域の人材や素材によって変わってくる。学校の教育活動やカリキュラムの面から見ると、学校がどういう風に地域と繋がろうとしているのかで変わる。
Ｄ校：学校規模により多少の違いはある。

ここから、学校規模の大小による違いもあるが、その学校の置かれた地域環境や学校の方針によって異なる部分が大きいことが推察される。

以上の５項目の設問によるインタビュー調査から、学校と地域コミュニティが連携する際の課題の原因として、「人口減少」と「働き方改革」の２つのキーワードが浮上してきた。図にまとめると以下のようになる。

○学校と地域コミュニティを繋ぐために教員にできることは？
・地域を愛する
・地域に出向く

○学校と地域コミュニティが連携する上での課題は？
・人口減少問題
・働き方改革とのバランス

○学校と地域コミュニティが連携する良さは？
・学びに多様性が生まれる。
・郷土愛を育むことができる
→後継者育成のため（人口減少問題）
・地域を活性化することができる。

○対馬が抱える大きな課題
・人口減少

⇩

・地域コミュニティの衰退
・地域行事などの担い手不足
・教員の負担増加

⇩

・人口減少問題を軽減していく必要性

長崎県や対馬市が抱える大きな問題として、人口減少や人口流出があり、それが地域コミュニティの衰退に繋がり、学校と地域コミュニティの連携を困難にしている現状が浮かび上がった。また、地域の人材不足から、教員が地域行事の補助をしていかなければならない現状があり、注意しなければ働き方改革の実現が難しい現状にあることも示唆された。このように、「人口減少」と「働き方改革」の２つは、離島部における学校と地域コミュニティの連携を考えていく上で、重要なキーワードであり、改善すべき課題となっていることがわかる。ただし、今回の文脈でいう働き方改革とのバランスは、地域の人材不足からくるものであり、課題の根本は人口減少であることは明らかである。よって、次に対馬市における人口減少問題への対策について考察を進める。

４．人口減少対策——対馬市役所へのインタビュー調査

本稿では、先行研究や新聞記事など[2]で動向を把握した上で、対馬市役所にご協力いただきインタビュー調査を実施した。時期は、2020 年の 2 月 14 日に 40 分程度であり、対象者は、対馬市役所の職員 3 名の方である。実施した３つの質問項目について以下、概要を紹介する。

設問１「現在、対馬市で取り組んでいる人口減少対策にはどのようなものがあるか。」という質問に対しては、以下のような回答が得られた。

・第二期対馬市まち・ひと・しごと創生総合戦略を現在作成している。
・対馬ならではの雇用の創出、島の魅力を活かした交流・移住・定住の拡大、安心して結婚・出産・子育てができる環境づくり、高齢者の方が健康で生きがいを感じることができる環境づくりの４つを重点戦略として掲げている。
・有人国境離島法で支援が拡大しており、国や県の補助を受けて成り立っている。

設問２「人口減少対策の効果はどのような感じであるか。」という質問に対しては、以下のような回答が得られた。

・有人国境離島法により、雇用者は増えているが、高校を卒業した若者が島外に出ることや自衛隊などの転勤者が多いことによって島外に出ていく人も多い。
・U、I ターン者は 100 名ほどいるが、高校生は 250～300 名ほど島外に出て行くってしまう。
・平成 30 年度 124 の社会減、平成 31 年度は 360 の社会減で、210 程度悪くなった。平成 28 年度から 30 年度までは、だんだん社会減の数は減っていたが、31

---

[2] 先行研究としては、大林由美子・末永和也(2019)が南知多町の人口流出を防ぐ方策を考察するために南知多町の住民に質問紙調査を行ったものを主として参照とし、新聞記事については、長崎新聞 2020 年 1 月 8 日の記事『五島市 転入上回る 合併後初めて社会増』で、五島市の社会増などを踏まえて調査を実施した。

年度は韓国との関係悪化もあって社会減が進んでしまった。

設問３「これから行っていきたい人口減少対策はあるか」という質問に対しては、以下のような回答が得られた。

・対馬市内の中学生の島外進学率が上がっているので、高校までは島内に残ってもらえるようにしていきたい。
・学業やスポーツで島外に出ることが多くなっているので、スポーツの指導者を招聘していきたい。
・バスなどの公共交通機関の自動運転を導入し、実用化していきたい。
・対馬市内の職場環境や休暇制度を充実させていきたい。

以上のインタビューから、対馬市においても対策が講じられ現在進行形で人口減少問題に取り組んでいる様子が明らかとなった。設問 3 でも出ているように、対馬市では大学がないために高校生が島を離れることが多く、そのまま島外で生活していることが一因であることが分かった。筆者自身も、高校から対馬を離れて長崎市内で生活をしてきたため、島を離れていく若者の気持ちを共感的に理解することができる。若者の人口減少問題を改善していくためには、設問３の回答にも挙げられているように、スポーツの指導者や、高校から先の進学先を作るといったことを行っていくことも一つの策であることが示唆された[3]。

５．考察

離島部である対馬市における学校と地域の連携については、その良さとして両者が連携して学校の学びを豊かにしたり、地域の活性化につながっていることが明らかになった。ただし、一般的に対比的に描かれる「離島部／本土部」という違いは、地域との連携を考える際には、有効な枠組みではないことも明らかになった。「離島部だから」、「本土部だから」という大きな枠組みではなく、それぞれの地域性や学校の方針から両者の関係を読み解いていくことの必要性が示唆された。

また、その一方で、両者の連携の課題については、学校教育の中だけでは解決することのできない人口減少問題にたどり着いた。この課題の解決については対馬市でも積極的な取り組みが行われているが、課題の解決に向けては、これからも様々な取り組みが必要であると感じた。筆者は対馬で小学校の教員として働く立場から、対馬市の人口減少問題の解決に何ができるのか、学校の中だけではなく、地域社会に広く目を向けながら考え続け、できることから行動していきたいと考える。

---

3 本稿では論考を進めることができないが、この点に関連しては、離島部におけるキャリア教育も重要な意味を持つことは明らかである。大脇和志（2018）は、人口減少時代の離島地域におけるキャリア教育の展望を明らかにするため新潟県の粟島を事例として論考を行っており示唆的である。

【参考・引用文献一覧】

大林由美子・末永和也(2019)「人口減少地域（消滅可能性都市）における人口対策の検討 —地域住民・ボランティア・専門職のとらえる地域課題と地域の強みに着目して—」『日本福祉大学社会福祉論集(141)』pp.27-43

大脇和志（2018)「人口減少時代の離島地域におけるキャリア教育 : 新潟県粟島の取り組みと小中学生の将来に対する意識に注目して」『地域と教育 : 筑波大学博士課程人間総合科学研究科学校教育学専攻「社会科教育学演習 I」調査報告(17),』pp.55-74

岩田貢(2009)「離島地域の中学校における地域学習の現状--長崎県対馬市を事例として」『竜谷紀要 31(1)』pp. 167-180

下橋邦彦（2016)「小学校は地域の生命線・地域の活性化が笑顔を生み出す : 少人数の小学校を守り育てるための各地の取り組みを通して」『大和大学研究紀要』pp.267-281

橋本健夫・楠本正信（1997)「小学校における環境教育のための地域教材の開発 2 離島での環境教育のための事前調査と試行的実践」『長崎大学教育学部教科教育学研究報告 (29)』pp.13-24

堀本雅章（2013)「学校の役割と住民意識 : 沖縄県水納島,慶留間島,大神島,鳩間島を比較して」『法政地理 (45)』pp.59-70

前田晶子(2004)「離島における地域の人間形成と学校--沖永良部島・国頭小学校の 1970 年代」『奄美ニューズレター (8)』pp. 9-17

長崎新聞 2020 年 1 月 8 日『五島市 転入上回る 合併後初めて社会増』